

の

* 籠 籠廻り太く矢束も拔群(會稽山) 矢軸を云ふ。和名抄に「の。籠をよむる矢の 度なるべし。矢竹の長さは普通十二束。

今日ば蚊帳の祝儀とて、萌黃の 生絹六の七の、屋の内祝ひ賑へども (五十年忌歌名佛 繫馬の暮の紋五) のがかりに染め込みしは、相馬の 家の總領の印(關八州)

〔幅〕布帛の幅を數へるに用ひる接尾語、普通 鯨尺八九寸乃至一尺を一幅とす。和訓栞に、 「の。日本紀に幅をよみり、絹布の度也。」

* のうげ 南無六道能化の地藏菩薩 (不生大念佛) 能化指南も恐れぬあ るれ者(孕常盤)

〔能化〕所化に對する語、教法を説いて衆生を 化益するを云ふ。「能化指南」は僧侶の師範役 である。

のうにんだいし 能仁大師法界をす べて我が智とし、虚空をつくして 我が身とし(釋迦)

〔能仁〕大師釋迦如来をいふ。祖庭事苑に「梵 云釋迦、此言能仁。瑜伽論に「能仁能化」 出無量衆生、令苦寂滅、又據中藏邪融外道」 出現世間、故號大師云。

* のえふす のえふす民こそ日出度 けれ(龜山遊) うつぶす。靡く。和訓栞に「のえふす。ぬえ ぶすに同じ。偃をこめり、萎臥の義也。」

* のおくり 立酒飲んで誰を野送り、 あゝ氣味わる(安藝) 〔野送り〕穢を野に送る義。葬送。

返かぬ身の上 牛七も伏し沈み、お 花ものかぬ身の上と、語るも聞く も主の内(安履切)

他人の事として退くことのできなない關係深き 身の上。好色五人女巻三、小判知らぬ休み茶 屋の條に、「我が一子未だ定まる妻ともな 無し、そなたも退かぬ申なれば、これにと申し かけられ、さても氣の毒まりける。」

* のがみ 烏育ちののがみの馬引つ 立て(今川了俊) 〔野鬘〕野生まの鬘。

のげばのうめ 身の程をしら髭、八 島のくづれ、諸道具のげばの梅、 兩の手に鐵輪(酒吞童子)

〔野鬘の梅〕「除け(即ち取拂ひ)をいひかけ たのである。野鬘梅は謡曲・東北(東北院の梅 さと和泉式部の古を語)の古名である。こゝ の文は、身の程を知らぬに白髭をいひかけ、 家財の崩れに八島のくづれをいひかけ、兩の 手に鐵輪の手に鐵輪にいひかけたのである。 白髭も八島も鐵輪も謡曲の題名である。

* のさばる なんと亭主久しいのと のさばり上れば(曾根崎) 張合の女 郎、近付になつて置きやとのさば り寄れば(安綱屋) あげくに愛まで のさばりつら、エエ憎や腹立や (大藏冠) のさばりこそ(龜山遊) 小 菊めが客と連立ちよしよしと下向 するも此筋と、のさばり返つてく る道(女殺)

「のじはるともいふ。伸張の義。のしあがる。 意氣あがり高ぶる。稱揚である。和訓栞に、 「のさ。無名抄に歌を評してのさなる所とい へり、のささともいふ。のさばのすの義、 意氣揚揚の意也。のさばるともいふゆり、大 語體にのさけと見えたり。」

のささの まづ太郎冠者を呼出して 申付けうと存する、のさ者あるか 横柄者をいふ。「のさばる」の條を見よ。狂言 記「あかがり」のさまのを呼びだし申しつ けうと存する、あるかやい。

* のじばる うぬが面付た者なら ず、眞直に白状せよ、のじばらば しやつ面をはつてはつてはりまは さん(安綱) のじばらば慕引斷り 宿札打割り引摺出せとののしりけ る(弘徽殿)

「のしはる(伸張)の義。のさばる」を見よ。 また轉じて剛愎な意にいふ。

のしめ すすす素鎗栗毛の馬、の のしめ 鬘斗目(藤原) 〔鬘斗目〕藤原の鬘に、生絲を縁にして織つた 絹布で、腰のあたりにのみ縋を織出したものを いひ、賀服に作る。和訓栞に「のしめ。今 經は練絲、縋は生絲の色ぬの名にいへり、の し縋の形に目を引て賀服とするなるべし。 この文は、馬を歩ます様を形容した「のし のし」を鬘斗目にいひつけた。

のたうつ 襟引寄せて剃刀の柄まで ぐつと一刀、突かれてうんと反返 り、のたうつ藍の蟲の息(永明日) 「ぬたうつ」のたをうつ「のたをうつ」と もいふ。もきてうねりころがる。移徙抄(元 祿五年大坂島籠橋雁金屋庄兵衛放)に「ぬた

うつ。ふしまろぶ也」按じるに「のたうつ」 はぬたうつ(沼田也)の轉である。沼田に 陥り泥濘を打つてもかく隠より轉じて、それ に似た煩燥の體をいひ、臨終の時に體態を動 かして苦むを云ふ。夫木和歌抄、卷二十七、 猪の題下に、後醍醐天皇の歌に「君戀ふと猪の かるもより疑覺して、あみけるぬたにやつれ てぞふる」と同、待賢門院安藝の歌に「戀をし てふま猪の床はまどるま、ぬたうちまます 夜半の寝覺」とある。ぬたも沼田である。 「ぬた殿」「ぬた堂」「ぬたくる」なども「沼田」 から出た語である。

のだめがた (最明寺殿) 〔籠橋型〕矢竹のそりをなめるに用ふる具。

* のたれをうつ うんとばかりにか つばと伏し、反つつ返しつたれ を打ち(卯月潤色)

〔のたうつ〕見よ。

* のたをうつ 橋には死骸のたをう つ(鎗籠) 〔のたうつ〕見よ。

後の葵 後の葵の下簾、賀茂の河原 をとどろかす(兼好)

賀茂明神の軒簾は四月中西の日であつて葵 葵と稱し、軒や簾に葵をまいた。祭過ぎこの 葵、後の葵といふたのである。

のちはる 「のじはる」を見よ。

「喉鎖」咽喉は九節から成れるものとしてみたのでかくらふ。和漢三才圖會・卷十二、支體部に「咽喉、和名乃無止、言吞處也、齒以後至三會厭、深三寸半、有九節」と。

「のどり」手綱を繰つて乗鎮めん乗廻さんとすれども、野取のかたなづけ高嘶きして尻込みするを(扇八景)

「野取」牧から捉へ来てまだ馴れぬ駒。夫木集に「おくの牧の野取の駒のかたなづけ、ともすればまたある君かな」。

「の寝ん寝んれこれ、音せてお寝れの」(參ろ門出八景)

神・佛、神社、日月などをまきしていふ兒女子の語である。蓋し古語「祈」または「乞」の字を「の」と訓じ、これより轉じたものであらう。なほ小兒語のことにつきは「とど」と「の」を見よ。

「のぶくに」下人に持たせし風呂敷より棒鞘の一腰を取出し、これは

「信國」來信國作の刀。信國は建武山城の刀匠で、初代を了戒といふ。西鶴撰「萬の文反古」卷一、世帯の大事は正月仕舞の條に、將又信國の小脇差、右に砥屋左兵衛(字子三)兩二歩までに付け申し候、是は元來正銘には極まり申さず候」と見えである。長町女腹切中の巻に、半七が信國の纏指の脇指を三十二兩に賣拂ひとある。

「のふずもの」生若い女の面に似合はぬのふず者、犬扶持持つて來らば、是に置いて帳につけ歸れ歸れといひければ(千疋犬) ヤア扱のふずもの、往還の道に横たはりのさばり伏したは何奴(藤田川)

「のべ」膝に凭れてさめざめと、涙はのべを浸しけり(會根嶺) 何時の間にやら大氣になり、延の鼻紙二枚三枚手に當り次第重ねながら鼻かみやる(冥途飛脚) 鼻紙の中から出す延の文(反魂香)

「延」延紙の略。和州吉野から産出し、大き縦七寸横九寸ばかりの小杉原紙である。旅客遊女の輩は常にこの紙を腰中に、鼻痰を拭去るなどに用ゐるによつて鼻紙ともいふ。

「のぼり」年もひさしの蓬菖蒲ば家毎に、幟の音のさめれば、男子持の印かや(女殺)

「幟」この文は五月五日端午の節句をいうためで、男兒ある家には幟を立て、甲冑飾器を飾り、陽の相に象り標を作つて祝ふ。拾言記に「五月給男子寮節句、懸具足甲冑旌綱縫長太刀等武具者、男子可出陣陣、振舞武勇、領國郡爲上功」故以出陣感勢之懸爲幟、云云。また端午の節句には蓬を軒庇に挿すから、「年も久ししを庇」にいひかけて「庇の蓬」といひつけ、菖蒲酒菖蒲刀など菖蒲を用ひるから、「蓬菖蒲」といひつけられたのである。日次紀事「五月初五日の條に、「市中家家挿菖蒲菖蒲文菖於欄間、各造標食之、凡中華謂菖蒲者石菖蒲也、本朝以二水

菖蒲爲菖蒲、……、又兒童師、貫籠長刀胞衣、旌旗於門州」。

「飲みしころ」奥にはなほも飲みしころ、踊るやら諸ふやら(生玉)

「呑みや」鳥はいかう酔うたさうな、これ往て休みや、お鳥お鳥と、茶を汲んで一つ呑みやといひけれ(二枚槍)

「のれに取られうか(會根嶺) 滑滑の義か。平然たさま。ぬらくら。菅原傳授手習鑑・第二に「恩ある方を流罪させ、のめいひ、雪女五枚羽子板、初春厄拂ひの條に「鶴と龜めが何うち食らつて、すつ百萬年のめりのめりと、くたばり外れにあやかりなされ」。

「のんこに髪結うて野良らし」い、伊達衆自慢といひそな男(天網島) 三五郎只一人のららとして立歸る(天網島) 九軒阿波座の野良鳥、月夜はなほか闇の夜も(泥鰌) コリヤのららつば、今朝卯の刻から内を出て、何時ぢやと思ふ(雀下り) 香庚申、はや今から野良か(わくわく) 傾城酒香重、のらそんざいの妻が身、氣色もしかか、挿られど(夕霧) 女房ともはのらと、何處にのらをかわいてある(冷泉節)

「野良」なまけること。のらくら。放蕩。新井君美自筆・抜擧・岩崎文庫所蔵に、「野良放蕩」。

「のり」左右に疊敷き並べ、前に白砂積みたるは、こぼれしりのりを清めん爲の用意なり(雲霧太平記)

「のりかひ」のりかひ物が干あがるがな、とりへて疊んで打盤出して、ちよきちよきと打て(香庚申)

「のんこ」その見物の中に、のんこに髪結うて野良らしい、伊達衆自慢といひそな男(天網島) 打揃うたる血氣盛り、煙草一服致さうまがち(香庚申) 立かけのんこ(女殺) 兩髪を細く狭く、髷を高くする結髪で、伊達を好む若者の間に流行したものである。色籠編百人後髮穿保三年刊に「結髪づくりのんこあれな」。柳亭筆記下に「産毛白浮の髪甲さし櫛弄にかきり、のんこわげの細島田小つぶがしらの丸髷」。

「のんこらし」とは、のんこ髷の伊達風である

との意。

は

はい 五臓の内にも肺は金(反魂香)

【肺】肺臓。腹中にある五種の内臓を五行に配して、肝は木、心は火、脾は土、肺は金、腎は水とする。

はい まだ市五郎三藏が船は見えいろ、心元なかげい(博多) 門出よ

かよか、よか便開かうばい(博多) 思ひきめた意をいふ長崎國訛の感動詞である。この語現今も用ひられ「間もなく日が暮れるから歸りますよ」といふことを、かの地方では「もう日もくるるけんきやあろうは」といひ、「宜し」ときまつた意に「よかばい」とよぶ。

はい 敵に赴く兵の枚を衝んで進むといひし古人の詞(稍變入道平正犬)

【枚】形したもので、兩端に小さい紐が附いてゐる。軍士これを衝んで紐を頭後に懸き、以て言語を發するを禁するのである。金銀を鳴らすを見る。

はいかい 栗毛たちまち泥附毛、はいかい 鞍も鎮まらず(女殺)

【泥文】馬の跳躍するをいふ。李尤に「天馬沛艾、鬣尾布分」。源平盛衰記卷二十八、宗盛補三大臣の條に「馬沛艾して、春日大宮にて高くあがりて走廻りければ」。

はいくわ 油の梅花剃刀も匂を惜む額際(雪女五枚羽子板) 色香揉込む

梅花の油(女殺) 燈油二升梅花一

合女殺 ふと室の津へ出かけ梅花のうつりをかきそめて、(女捕)

【梅花】梅花油の略。蠟 胡麻油などを交へ、梅花(龍腦、麝香、丁香などの混合物)を加へて練り、女が頭髪に塗る香油の名である。梅花の配製法は、女用訓蒙圖彙卷五、布袋の方梅花の條に委しう載せてある。

*はいしよ まつ菅承相をこれへ召せよ、衣冠を剃ぎ直に配所へ送るべし(天神記) 罪なくして配所の月を見んといふ古人(薨門松(兼好))

【配所】配流された地。通稱。「罪なくして配所云云」はその條を見よ。

*はいいた さてさて知れたるげいいためら、おのれば正しく曾我兄弟が思ひもの虎が懸 懷妊なればとて夜な夜なかける男の數、どれがどれやら何のその夫に覚えのあるものか、言ひすて歸れば海野太郎、ヤイヤイはいため待ち居らう(百日曾我 あのばいた髪の毛抜き(女夫也))

【女】賣女。賣女。書字考師用集人倫門にも、藤麻船北元編、續菜にも「賣女」に「パイタ」と振假名を附けてある。蓋し拙人の轉訛であらう。

*はいだて 上帯草摺はいだてにむらすむんすと取附いたり(兼好) 草摺つかんではいだて搔上げ(源經親)

【草摺】腰に巻ける帯、和漢二字圖書、卷二十、兵器に「腰摺所」著、陸奥、有三板腰摺踏込、腰摺伊豫腰摺越中腰摺等、大抵摺之華性、而騎士善之最佳、如「歩卒」不用、腰摺呼一節「二」掛。

*はいとくさん 此年まで敗毒散一

【はいとくさん】「はいとく」を見よ。

服飲まぬこの親仁ゆすりはたべぬ(女腹切) 何某は暑や寒やの風の神、手療治の生薑酒。敗毒散に追出され(振袖始)

【敗毒散】漢方薬の名。風邪の薬である。もと支那で製した薬であるが、我國にてもその法を傳へてこれを製したが、明劉宗厚編「玉機微義」(寛永五年の刊本)もある。卷五、雜方條に、「良方治疫癘癘敗毒散多加入麥、甘草、陳皮、姜、煎服」。

*はいにんどもん ええ淺ましや、賣人土民の子にてさへ七歳八歳より東西を辨へて、物の道理は知るぞかし(雜曲) 生きとし生ける者命惜まぬものやある、其一命を義につて捨つるを弓取武士と名付け、惜むを賣人土民といふ(堀山堤)

【賣人土民】商人野夫の輩は武士のやうには義理を辨へぬ者とされてゐたのである。

はいぶき 「はいぶき」を見よ。

*はいまう どうぞ助けて助けてと騒げば夫も敗亡し(天網島) なほも續けて打つ石は、提灯も打破れ由兵衛も敗亡し今宵、これこれ徳兵衛殿、我女房に隠るるとは何事と、聲かけられて夫も敗亡し(女殺)

【敗亡】失敗。閉口。窮すること。

はいよせ 「はいよせ」を見よ。

*はいろく 使者貝勒王謹んで、韃靼國と大明國古より威を勵み(國性鑑)

【貝勒】滿洲語 Beile であつて、清朝では郡王の次の爵號。

故を衝む 「ばい」を見よ。

*はいんど 雑色はいんど口口にだまりませ静まりませと制すれども頼光親子は見やり給はず(弘敷殿)

【頼光】頼朝の孫、頼朝の義弟、大隅薩摩國人の親である。この國人朝廷に召されて仕へ、永く留りて京の人となれども、子孫までもなほ年人と稱しての職に仕へた。雑色の輩で下官の者である。

はうおんかう 「ほうおんかう」を見よ。

*はうかぞう いかにかに面、はうかぞうは何れの祖師禪法を御傳へ候ぞ(用文章)

【放下僧】剃髮ささら等の禪子を用ひ、歌舞經業等品などを業とするものをいふ。人倫訓蒙綱要(元祿三年刊)卷七に「放下は字訓の意はななくだす也、禪家に於て諸尊を打捨つるを放下するといふ其心也、たとへば鼻の上に立物をし、枕を重ねて自由につかひ、山の芋を踏んで、枕を重く置かれ變化不思議の體をなすこと、萬事の當體を放下して物にとこほりなき體にしなす故に放下といふ也、あや指金輪つかひ皆放下なり」。

はうきばう 四國は大山伯者坊、飯綱の三郎、富士太郎(十二巻)

【伯者坊】伯者大山に據む天狗の名。謡曲。飯綱天狗に「四州には白衆の相模坊、大山の伯者坊、飯綱の三郎、富士太郎」とあるに據つたものであるが、四州は四國のことである。白衆にかゝる語であるのに、菓林子これを四國(大山伯者坊)といつては誤と見る可い外ない。

はうきやう 御法もかいびやくの、はうきやうの聲告げ渡る(釋迦)

【方響】佛堂に用ふる樂器である。箋注後名類聚抄、調度部音樂具に「方響。律書樂圖云、